資料２

委員から提出された「まちの将来像」

No.	「まちの将来像」 キャッチコピー	キャッチコピーに込めた思い・理由
1	人と町	住みやすい町を地域の人と環境を作り地域の人だけでなく県外の人や外に行った人が戻ってきてもいいような町にする
2	スマートｋａｓｏｃｈｉ （スマートカソチ）	【「田舎」ではなく「過疎地域」です】 吉賀町は「昔ながらの田舎」ではなく、人口減少が進んだ未来の日本の一つとなる「過疎地域」です。過疎化が進み、旧来の窮屈なしがらみや習慣は薄れ、都市部に見られるような「人権意識」「男女共同参画」「多様性への寛容さ」「コンプライアンス」が自然と根づきやすい土壌が生まれています。町民が望んでいたともいえます。 【細かい理由①：地理的環境と「広島広域都市圏」参画により実現した都市圏住民】 当町は松江市よりも政令指定都市である広島市の方が圧倒的に近く、幼い頃から日常的に都市機能や洗練された文化や消費に触れる機会が多い環境にありました（吉賀町に住んでいるが感覚、価値観は地方政令都市）。さらに「広島広域都市圏」に正式に参画していることで、行政・経済の枠組みとしても大都市圏との連携がスタートしています。広域連携や都市感覚の流入は、中山間地域から「大都市圏とつながるスマートな過疎地」へと変わっております。 【細かい理由②：現代的価値観を体現する地域構造と、創業・企業誘致の新たな可能性】 役場や福祉・医療・教育など、コンプライアンスや人権感覚、を日々重視する職場で働く住民が多く、スマートな社会通念が共有されたorされやすい環境にあります。 さらに当町が「広島広域都市圏」の一角であることは、商工業の未来にとっても大きな強みです。約200万人規模の大都市圏市場やネットワークと直結している環境は、町内住民による新たな創業、UIターン者による起業、企業の誘致を進める上で有利に働くのではないかと考えます。

No.	「まちの将来像」 キャッチコピー	キャッチコピーに込めた思い・理由
3	小さくても、めぐり続けるまち めぐり、そだつまち 小さく、めぐり、そだつまち	「小さく」には、町を小さくすることを目指すのではなく、人口や経済規模の大きさだけを、町の豊かさの物差しにしないという思いを込めています。規模が小さくても、暮らしや営みがあり、人と人とのつながりがあり、町として機能し続ける。小さいからこそ、人の顔が見え、身軽に試し、変えていけることも、この町の強みになり得ると考えます。 「めぐり」には、高津川の水源を抱き、森や農地から生まれる恵みとともに暮らしてきた吉賀町のように、人やもの、お金、知恵が町の中を循環し、さらに町の内と外を行き来する姿を重ねています。地域にある自然や資源を地域の中で活かし、そこから生まれた価値を町外へ届ける。そして外からも人や知恵が入ってくる。小さくても閉じるのではなく、絶えず外とつながり、行き来のある町でありたいと思います。 「そだつ」には、人や仕事、暮らし、人と人とのつながり、そして一人ひとりの「やってみたい」という思いが、それぞれの形で育っていける町であってほしいという願いを込めています。この町に生まれた人も、外からやって来た人も、それぞれの個性や状況にかかわらず、ここにいたいと思えばいられる。そして、何かをやってみたいと思ったときには、まず試してみることができる。そんな町でありたいと考えます。 育てることは、ただ同じものを守り続けることでもありません。今あるものに手を入れながら、試して、変えて、ときにはこれまで続けてきたものを見直す。そうして生まれた余白から、また新しいものが芽吹き、育っていくこともあります。 小さいからこそ、めぐる。めぐるから、そだつ。そだったものが、また次へめぐる。 高津川の水や森のように、変化しながら循環し、次の営みを育てていく。規模の大きさではなく、こうした循環が続いていることを町の豊かさと捉え、長く続いていく町でありたいという思いを込めた将来像です。
4	サクラマスでつなぐ我が町吉賀	町は若者を育て、大海原で生きていく術を伝え、教える。そして荒波に揉まれて成長した若者は町に戻り、町を守る。そんな循環が出来る町になってほしいです。

No.	「まちの将来像」 キャッチコピー	キャッチコピーに込めた思い・理由
5	学びが、まちをつくる。小さな吉賀から、大きな未来へ。	「学びが、まちをつくる。小さな吉賀から、大きな未来へ。」には、人口減少や人材不足の時代に、これまでの仕組みをそのまま維持するのではなく、未来を見据えて、人・財源・施設・地域資源を選択し、つなぎ直して生かしていきたいという思いを込めています。ふるさと学習や探究学習を核に、地域と学校の新たなつながりを築き、旧柿木・旧六日市の垣根を越えて吉賀町全体で人を育てる。さらに、「吉賀町コンパクトタウン」として、限られた資源を未来につながる分野へ重点的に投入し、新たな価値を生み出す。小さくても、何を残し、何を変え、何に力を注ぐのかを町全体で考え、子どもから高齢者、移住者や外国人まで、多様な人が活躍し、挑戦できる町になってほしいと願っています。
6	住みたい、帰りたい、誇れる町。 吉賀	「住みたい」＝移住、「帰りたい」＝若者・出身者の回帰、「誇れる」＝町民の意思を表現しています。10年後の吉賀町は人口や経済規模だけを追い求めるのではなく、「ここで暮らしてよかった」「ここで暮らし続けたい」と町民が実感できることが重要であるため。
7	なにもないけどなんかいい なにもなさが一番の自慢に 名所はないけど居場所がある	自然を大切にしつつ、住む人、訪れる人が楽しさや安らぎを与えられる町
8	人と人との繋がりを大切にする町	今薄れてきている人と人とのつながりをいつまでも大切にして欲しい
9	誰でも気軽に寄れるまち	人口減少が進む中、定住人口を増やすことだけでなく、町を訪れ、滞在し、さまざまな形で町と関わる人を増やすことも、地域の活力につながると考えます。 観光やアウトドア、農業体験、短期滞在、あるいは旅の途中の立ち寄りなど、目的や滞在時間を問わず、誰でも気軽に訪れることができる。来た人を温かく迎え、帰る人を気持ちよく送り出し、また来たいと思った時にはいつでも戻ってこられる。そんな町であってほしいと思います。 一人ひとりの滞在は短くても、人の行き来が増えることで、地域での消費や交流、新しいつながりが積み重なり、町の活力につながっていくと考え、「誰でも気軽に寄れるまち」としました。

No.	「まちの将来像」 キャッチコピー	キャッチコピーに込めた思い・理由
10	自然とともに、人がつながり暮らすまち	仕事をする中で、この町で安心して暮らすために、人と人とのつながりは、必要不可欠だと感じています。また吉賀町の魅力は何といっても豊かな自然だと思うので、欲張りではあるかもしれませんが、その二つの思いを合わせて、このようなコピーを考えました。
11	未来を自由にデザインしよう。新しい「美しさ」を創り続けるまち	まちづくりは、行政だけが担うものではなく住民みんなが主体的になり、「こんな町にしたい」、「こんな暮らしがしたい」という想いを自由にデザイン（設計）していく。その挑戦のプロセスそのものが、これからの吉賀町には必要ではないでしょうか。 目指す「美しさ」とは、形のある芸術だけでなく、多様性を認め合い、変化を恐れず、自分らしく生き生きと暮らす姿そのもので、これから最も投資し、大切にすべき軸は「次世代の育成」と考え、子どもたちの無限の「創造力」を町の中心に据え、彼らがのびのびと未来を描ける環境になればとの思いです。 世界的な視野で未来を見つめてきた二人の巨匠、澄川喜一氏と森英恵氏もいます。
12	幸せの源流、吉賀。 〜清流が紡ぐ、人と自然と未来〜	人口が減っていく10年後も、まず大切にしたいのは人と人とのつながりです。それを支える医療・福祉・教育・交通・買い物といった暮らしの基盤があってこそ、「特別ではないけれど幸せだ」と感じられる。その実感が、若い世代が住み続けたい、一度町を出た人が帰ってきたいと思う理由になります。 私たちの祖先が高津川とともに生きてきたように、この清流の一滴のごとく、人のつながりも、安心できる暮らしも、それを支える自然も、次の世代へめぐり、受け継がれていく。それこそが幸せだと考え、「幸せの源流、吉賀。」という言葉に込めました。
13	山の守り人は水の守り人。水のふる里に暮らす幸せ、吉賀町。	水を求めて人が集まり集落ができ、そしてその土地に文化が生まれる。吉賀町は文化の源「水」が生まれるふる里。著名な文化人を育んだ豊かな森と美しい里山の中で、心豊かに暮らすことができる穏やかな町をイメージしました。 併せて、高津川が清流であり続けるためには健全な森が必要。山を大切にする町であって欲しい思いも込めました。

No.	「まちの将来像」 キャッチコピー	キャッチコピーに込めた思い・理由
14	森林と有機農業が暮らしをつむぐ町	吉賀町は森林が土地の９割をしめていること。有機農業が盛んだということ。私たちの暮らしは、この２つで成り立っているといってもよいくらい、これらに支えられている。 “つむぐ”というのは、物事や関係・物語などを少しずつ形にするという意味。
15	水清く、人つどうまち、よしか	①「水清く」について a.中高生をはじめ、幅広い年代のアンケートにみられたように、いつまでも清流高津川を大切にしたい、環境を保全していこうという思い。 b.高津川を町、町民を水に例えたとき、「水清く」とは、「町に住む人、働く人が心身ともに健康でいる」ことを表す。また、それが可能となる環境の実現を目指すという意味も含む。 ②「人つどうまち」について a.老若男女、地元の人、町外からの人、国外からの人、様々な人が暮らしたり働いたりする町という意味。 b.「つどう」は「町に定住する」ことや「町内で働く」ことに限らず、吉賀町に対して多様な関わり方をするという意味を込めて選んだ。 例えば、自分の夢や目標実現のために「一定期間滞在する」。 あるいは、異動を伴う職業の個人や家族が「数年間住む」など。 c.吉賀町に定住または吉賀町を終の住処としてもらうことがベストかもしれないが、若い世代が移り変わりながらも絶えず一定数町内に暮らす。 それによって、維持されるべきものが維持されつつ、新たな風を吹き込み、持続可能な町となっていくことを目指したい。
16	水源のまち～きれいな川と心～	様々な世代、業種、障がいの有無のかかわらず、だれにもやさしい町づくりを目指してほしいという思いを込めた。

No.	「まちの将来像」 キャッチコピー	キャッチコピーに込めた思い・理由
17	はじまりの水と、心のふるさとに出会うまち ちいさな町で、おおきなゆとりと生きていく	人口減少をしていく中でも、一人ひとりが自分らしさに気づき、豊かな心でその人らしい暮らしを選択できる町であってほしい。 物質的・経済的な豊かさばかりを目指すのではなく、心のゆとりや自然との共生から生まれる心身の充足感を得られる町であってほしい。 高津川をはじめとした豊かな自然を守り育て、恩恵を受け続けていてほしい。